

雄勝地域の

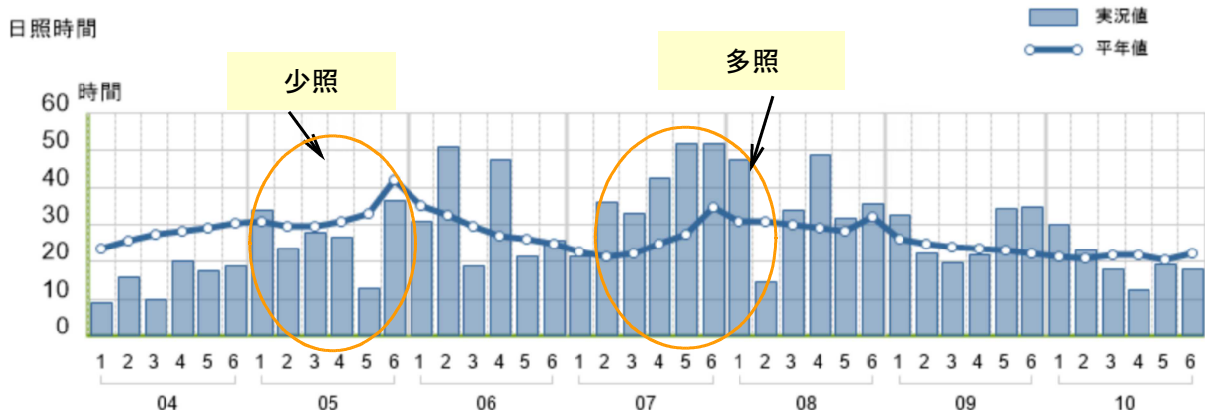
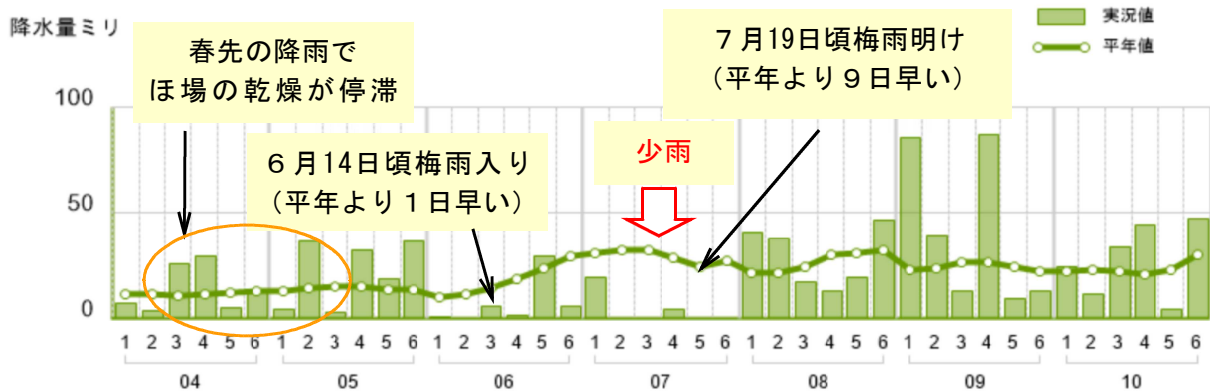
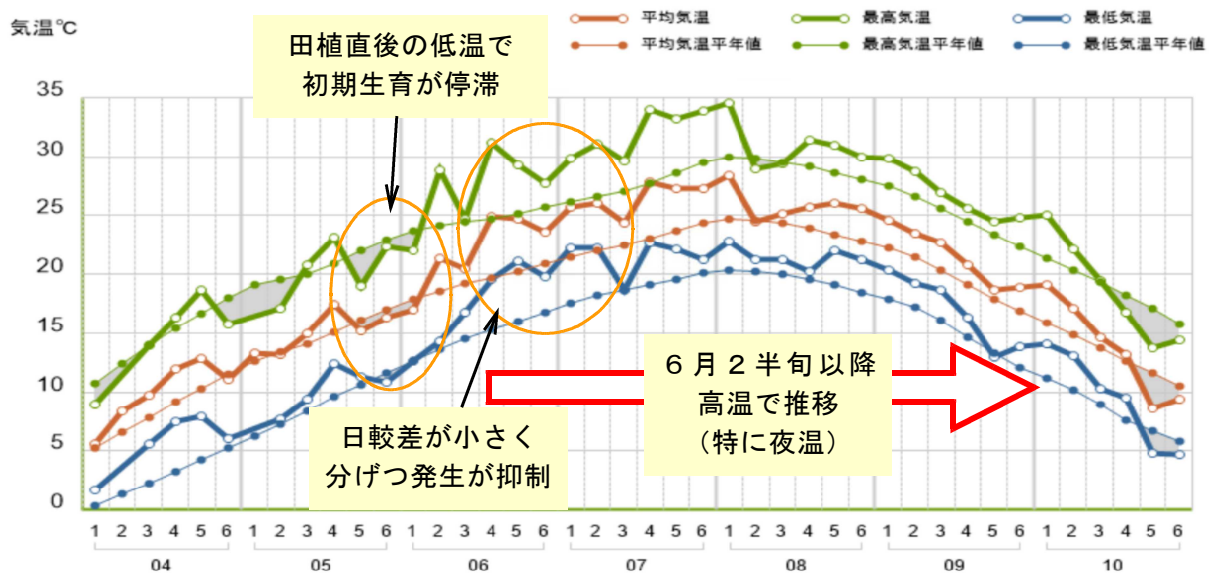
稲作だより

令和7年12月25日(木)
雄勝地域振興局農林部
農業振興普及課

TEL 0183-73-5180
FAX 0183-72-6897

品質・食味は良好。登熟歩合と千粒重の良否が作柄に影響
適正籾数の確保で収量、品質の安定化を！

【これまでの気象経過】(アメダス湯沢：4月1半旬～10月6半旬)



I 気象の平年比較(アメダス湯沢)

項目 月	平均気温(°C)		降水量(mm)		日照時間(hr)	
		平年差		平年比		平年比
4月	9.9	+1.3	83.0	120%	91.4	55%
5月	15.1	+0.7	131.0	156%	160.7	85%
6月	22.0	+3.0	44.0	41%	195.3	113%
7月	26.5	+4.0	24.0	16%	236.3	151%
8月	25.9	+2.0	174.5	105%	211.8	118%
9月	21.5	+2.2	246.5	179%	164.7	122%
10月	13.4	+0.7	165.0	125%	120.3	93%

II 雄勝管内の生育概況

① 播種期～育苗期

播種作業は、始期4月19日(平年並)、盛期4月25日(平年並)、終期4月29日(平年より1日早い)となりました。

この期間、周期的な降雨や曇天となる日が多く、気温は平年よりやや高く推移しました。

苗の生育は概ね順調だったものの、ハウス内温度の急上昇に、ハウスの開閉作業が遅れたところでは、葉先やけや障害がみられました。

② 移植期

田植作業は始期5月19日(平年並)、盛期5月25日(平年並)、終期6月2日(同2日遅い)となり、周期的な降雨によって、平年と比べ作業期間が長くなりました。

田植後5日間の移動平均気温(図-1)は、中苗移植の目安である14°C以上となりましたが、最高気温が低く、日照時間の少ない日が多かったため、活着や初期生育がやや停滞しました。

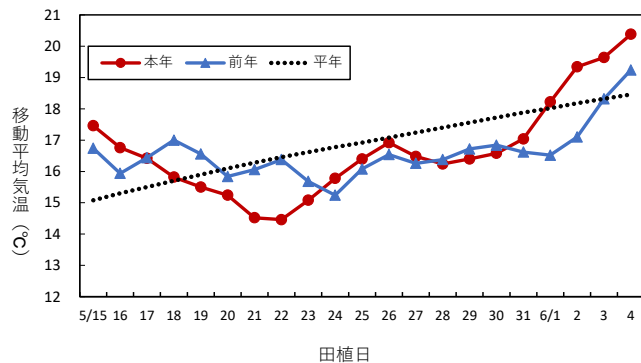


図-1 田植後5日間の移動平均気温(湯沢市)の推移

③ 分けつ期～有効茎決定期

水稲定点ほ(あきたこまち:8か所)における6月25日の調査結果では、草丈は41.7cm(平年比114%)と長く、茎数は406本/m²(同比108%)と多くなりました(図-2、3)。7月4日の調査結果では、草丈は61.3cm(同比118%)とかなり長く、茎数は469本(同比93%)と少なくなりました(図-2、3)。

6月2半旬以降、高温で推移し、特に最低気温が高かったため、草丈が長めに推移しました。また、6月3半旬から7月1半旬まで、日較差(1日の最高気温と最低気温の差)の小さい日が続き、分けつ期の発生が緩慢になりました。

④ 幼穂形成期～減数分裂期

7月15日の調査結果では、草丈は73.0cm(平年比113%)と長く、茎数は450本/m²(同比88%)と少なく、葉数は11.5葉(同差+0.2葉)とやや多く、葉色は41.8(同比95%)と淡く推移しました(図-2～5)。

梅雨明けが早まり、まとまった降雨がなく、高温・多照で推移したことで、干ばつ傾向となったほ場が多く見られました。干ばつ傾向が続き、稲体が消耗し、葉色が淡くなったと考えられます。

⑤ 出穂期以降

高温で推移したことで生育が進み、管内の出穂盛期は平年より1日早い8月1日となりました。

8月18日の調査結果では、穂数は407本/m²(平年比91%)と少なくなりましたが(図-3)、有効茎歩合(穂数÷最高分けつ期の茎数×100)は85.9%(同差+1.0ポイント)と、高くなりました。

刈取始期は9月16日（平年より3日早い）、刈取盛期は9月27日（同2日早い）、刈取終期は10月10日（同1日早い）となり、刈取作業は平年より早まりました。

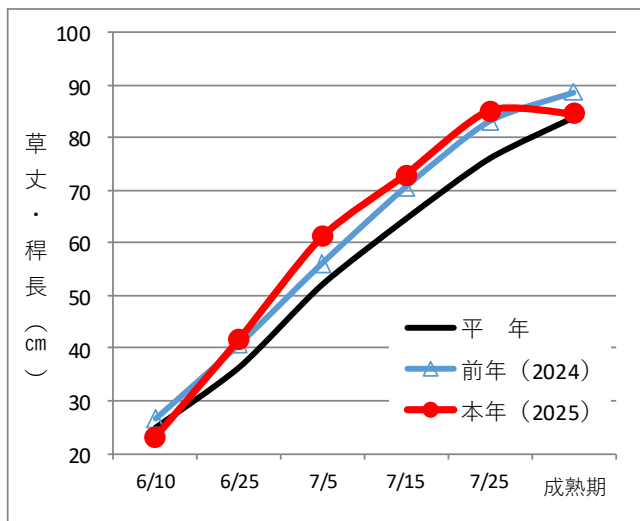


図-2 水稻定点調査ほの草丈・稈長の推移

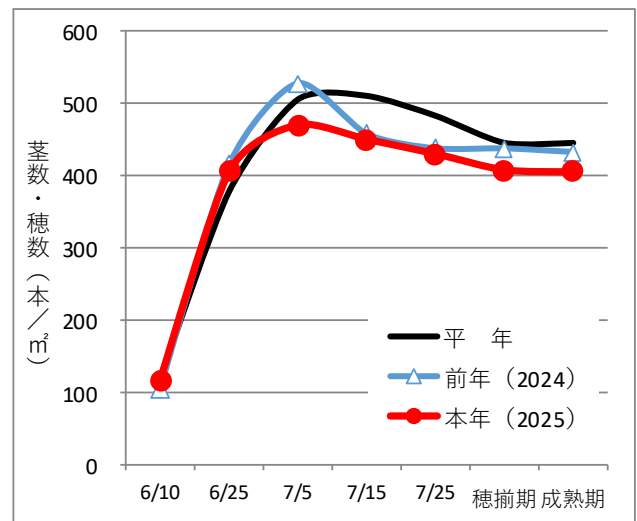


図-3 水稻定点調査ほの茎数・穂数の推移

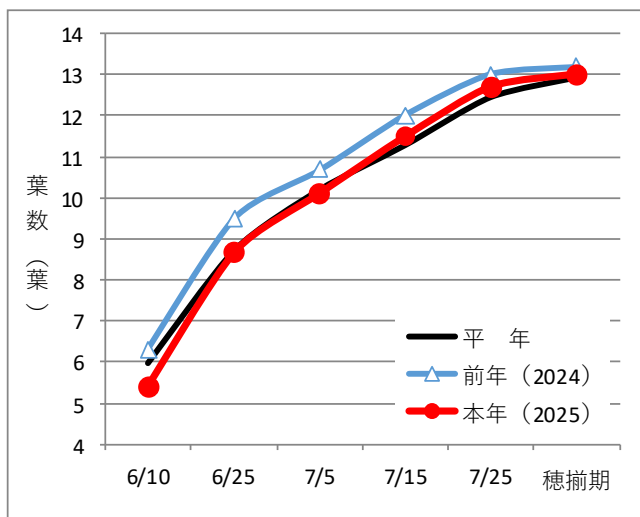


図-4 水稻定点調査ほの葉数の推移

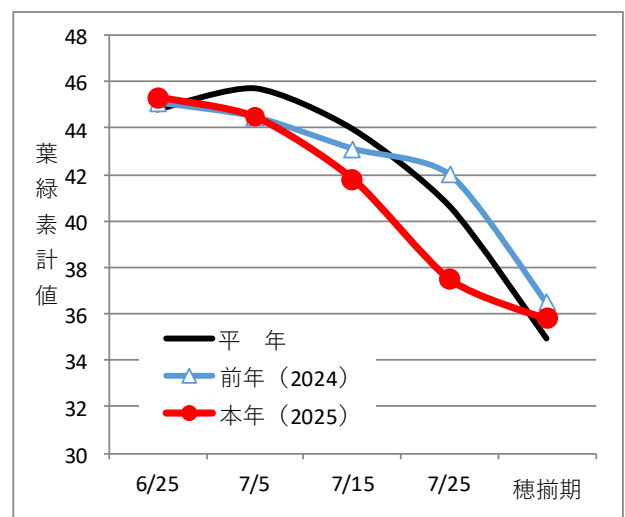


図-5 水稻定点調査ほの葉緑素計値 (SPAD) の推移

⑥ 収量構成要素

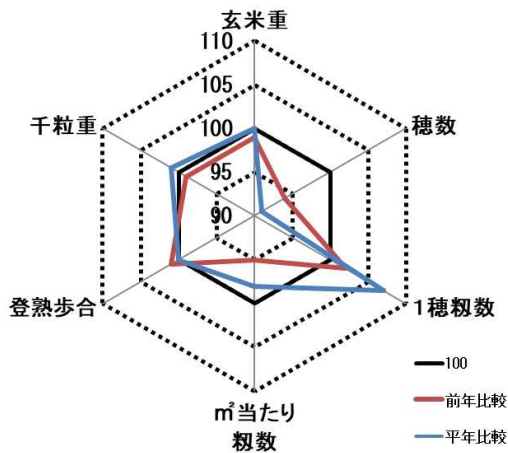
一穂粒数が74.7粒（平年比107%）と多かったものの、穂数が406本/m²（同比91%）と少なかったため、m²あたり粒数は30.3千粒（同比97%）と平年よりやや少なくなりました。

登熟歩合は85.7%（同差+0.7ポイント）と平年より高く、千粒重は22.6g（同比101%）と平年並、玄米重は580kg/10a（同比100%）と平年並でした（表-2、図-6）。

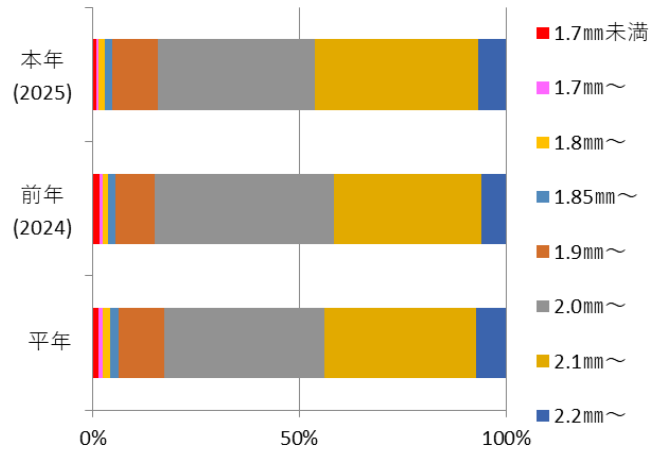
表-2 水稻定点調査ほの収量及び収量構成要素

	穂数 (本/m ²)	1穂粒数 (粒)	m ² 当たり粒数 (粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	玄米重 (kg/10a)
本年(2025)	406	74.7	30,283	85.7	22.6	580
平年	445	70.1	31,144	85.0	22.4	581
平年比較	91%	107%	97%	+0.7	101%	100%
前年(2024)	432	73.5	31,936	84.8	22.0	584
前年比較	94%	102%	95%	+0.9	103%	99%

※平年は過去10年間の平均値、玄米重は1.9mm網で調整。



図－6 収量構成要素の比較



図－7 水稲定点調査ほの粒厚分布の比較

1.9mm以上の粒厚別割合は95.2%（平年差+1.6ポイント）となり（表－3）、くず米重は29kg/10a（同比67%）で例年より少なくなりました。

表－3 水稲定点調査ほの粒厚別割合

	粒厚別割合(%)	
	1.9mm以上	1.9mm未満
本年(2025)	95.2	4.8
平年	93.6	6.4
平年差	+1.6	-1.6
前年(2024)	94.4	5.6
前年差	+0.8	-0.8

※平年は過去10年間の平均値

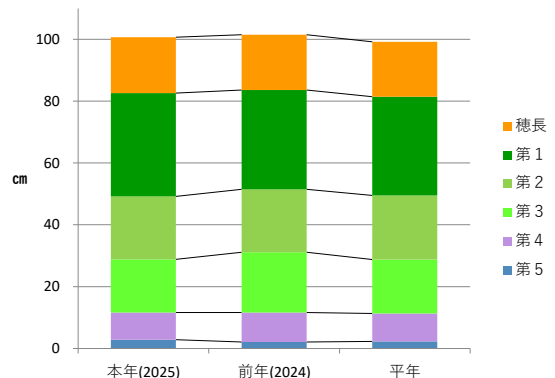
表－4 水稲定点調査ほの全長、穂長、稈長及び節間長の比較

	全長 (cm)	穂長 (cm)	稈長 (cm)	節間長(cm)				
				第1	第2	第3	第4	第5
本年(2025)	100.7	18.1	82.6	33.4	20.4	17.2	8.8	2.8
平年	99.1	17.8	81.3	32.0	20.7	17.4	9.1	2.3
平年比(%)	102	102	102	104	99	99	97	124
前年(2024)	101.6	17.9	83.7	32.1	20.4	19.5	9.5	2.1
前年比(%)	99	101	99	104	100	88	93	133

※平年は過去10年間の平均値

平年と比べ、穂長が18.1cm（平年比102%）、稈長は82.6cm（同比102%）とやや長くなりました（表－4、図－8）。

節間長は、第4節間長と第5節間長の合計が11.6cm（同比102%）と適正な長さとなったことに加え（表－4、図－8）、中干しにより根の活力が保たれたこと、田面が乾き地耐力が強化されたことにより、倒伏程度は0.5（平年並）となりました。



図－8 水稲定点調査ほの穂長、節間長の比較

表－５ 水稲うるち玄米の農産物検査結果（令和7年11月末現在）

生産年	品種	検査総数 (t)	1等		2等		3等		規格外	
			数量(t)	割合	数量(t)	割合	数量(t)	割合	数量(t)	割合
本年	あきたこまち	13,246	12,057	91.0%	997	7.5%	93	0.7%	99	0.8%
	水稲うるち玄米合計	15,565	14,127	90.8%	1,237	7.9%	100	0.6%	101	0.6%
前年	あきたこまち	12,824	11,193	87.3%	1,440	11.2%	111	0.9%	80	0.6%
	水稲うるち玄米合計	15,375	13,241	86.1%	1,870	12.2%	183	1.2%	81	0.5%

管内の「あきたこまち」の一等米比率は91.0%で、前年より3.7ポイント高くなりました（表－5）。主な落等理由は、着色粒（主に斑点米カメムシ類）が51%、形質（主に充実度不足）が40%、被害粒（主に胴割粒）が5%となっています。

Ⅲ 病害虫の発生状況

①いもち病

○葉いもち

病害虫防除所が7月5半旬に実施したほ場調査の結果、穂いもちの主な伝染源となる上位2葉の発病株率は0.3%（平年0.2%）とやや高く、同地点率は6.3%（平年2.8%）で高かったことなどから、防除対策情報第8号（7月25日発表）により、葉いもち発生ほ場での穂いもち防除の徹底が呼びかけられました。

BLASTAM法による葉いもち感染好適日判定では、アメダス湯沢で6月15日と26日に感染好適日が観測されましたが、計画的な防除の実施により、管内全体での葉いもちの発生量は平年並でした。

○穂いもち

葉いもちの発生量が平年並で、7月19日の梅雨明け以降は、高温少雨で経過したことで感染が抑制され、収穫期における穂いもちの発生量は平年よりやや少なくなりました。

②紋枯病

病害虫防除所が7月5半旬に実施した巡回調査の結果、発病株率は1.2%（平年1.8%）、同地点率は12.5%（平年14.7%）といずれも平年並となりました。

③斑点米カメムシ類

ノビエやカヤツリグサ科雑草が発生している水田で斑点米カメムシ類の発生が多かったため、病害虫防除所から、防除対策情報第7号（7月18日発表）により農道や畦畔等の除草の徹底、防除対策情報第10号（8月7日発表）により水田内雑草の発生しているほ場などでの追加防除が呼びかけられました。

管内では、ノビエやホタルイ等のカヤツリグサ科雑草が残草し、出穂しているほ場を中心に、斑点米カメムシ類による被害がみられ、管内全体の斑点米カメムシ類による被害は平年並～やや多くなりました。

Ⅳ 今年の作柄に影響した要因

① 春先の降雨で乾土効果が少なく、稲わら分解が緩慢で土壌還元が進行

3月下旬からの周期的な降雨により、十分に乾いていないほ場が多く見られました。このため、春先の土壌の乾燥による土壌窒素の無機化（乾土効果）が少なく、稲わらの分解が緩慢で土壌還元が進行したことにより、移植後の活着の遅れや分けつ発生の抑制等に影響したと考えられます。

② 5月下旬の低温・日照不足と分けつ期の小さい日較差により、茎数・穂数が不足

田植え後の低温と日照不足の影響で活着が停滞し、初期分けつの発生が抑制されました。6月2半旬以降は、高温により生育は回復基調となりましたが、6月3半旬～7月2半旬の日較差が小さかったことで、分けつの発生が緩慢になりました。

最高分けつ期頃（7月4日調査）の茎数は平年より少なく（平年比93%）、穂数不足につながりました。

③ 登熟期間の高温多照により粒厚が厚く、登熟歩合が向上

出穂期以降、気温が高く、日照時間が多く推移したため、登熟は順調に進みました。

粒厚分布は、1.9mm以上の粒厚別割合が95.2%（平年差+1.6ポイント）と高くなり、粒の肥大が大きく、登熟歩合は85.7%（同差+0.7ポイント）と高くなりました。

粒肥大や登熟が順調だった一方で、千粒重が平年並だったのは、出穂前にほ場の干ばつ傾向が続き、稲体が消耗したことで粒が小さく形成されたためと推察されます。

【次年度に向けた技術対策】

I 気象変化に強い土づくり

① 排水対策

透排水性が改良されたほ場では、土壤の乾燥、酸化によって、稲わらの分解や土壤窒素の無機化が促進されるほか、耕起などの機械作業も進みます。

排水性を向上させるために、暗きよ、補助暗きよの施工のほか、排水不良田では、溝切りや明きよの施工で表面排水を図りましょう。

なお、排水改良により、有機物の消耗、塩基の流亡、鉄・マンガンの溶脱も進むので、深耕、有機物や土づくり肥料の施用などを組み合わせて行いましょう。

② 根を深く張らせる環境づくり

酸素を供給して根を活性化させるため、作土深は15cmを目標に根域を確保しましょう。また、耕深を確保するには一度に深くすることは避け、年数をかけて少しずつ深くするとともに、排水が不良なほ場では排水対策を併行して実施します。

③ ケイ酸質資材の積極的な施用

ケイ酸質を多く含む籾殻等が、収穫によってほ場外に持ち出されることで、ケイ酸は年間約40kg/10a減少するとされています。土壤にケイ酸が少ないと、根の吸水力が低下して蒸散量の減少を招き、葉温が上昇します。この葉温の上昇がストレスとなって、玄米外観品質の低下につながることから、ケイ酸質資材の積極的な施用に努めましょう。

また、根域の発達や受光体勢の改善、倒伏の軽減にもケイ酸質資材が有効です。

II 健苗育成

① 種子予措

浸種（種子消毒）時の適水温は10～15℃です。浸種期間は水温10℃で6～8日、14℃で6日程度とし、適正な水量（種子1kg当たり水3.5リットル）で行い、浸種期間中の水の交換は2～3回までとします。催芽は、催芽開始時に必ず36～40℃のお湯で湯通しし、その後、30～32℃の水温で行います。催芽の出来上がりはハト胸程度とし、伸ばし過ぎには注意します。

② 育苗期間中の温度管理

育苗の温度管理は、その後の生育や田植え時の苗質の善し悪しに大きく影響します。高温にしすぎると葉が伸びやすく軟弱徒長の原因となります。また、急激な温度変化はもみ枯細菌病等の病害や生育障害の発生を助長しますので、適正な温度管理に努めます。出芽までの温度は32℃を越えないようにし、被覆期間を必要以上に長くしないようにするとともに、出芽後の再被覆は厳禁です。

通気管理は1葉期頃から実施し、播種後20日間は最高気温25℃以下、最低気温5℃以上を保つようにします。

Ⅲ 適期田植えと適正な栽植密度の確保

極端な早植えや遅植えは、その後の気象経過により作柄や品質に影響を及ぼしますので、適期に田植えを行いましょう。近年、作付け規模の拡大に伴って、田植え作業に要する期間が長く、栽植密度が低下する傾向にあります。栽植密度の低下は、その後の茎数確保（穂数確保）に大きな影響を与えます。坪当たり70株を基本とし、標高が高いほ場では、より密植にします。植付本数を調整することで、栽植密度を増加しても使用箱数は大きく変わりません。

Ⅳ 肥料の種類に応じた肥培管理

目標収量を確保するためには、ほ場に合わせた適切な肥料および施肥量とする必要があります。肥料の表面を水の浸透が遅い被膜でコーティングされた被膜窒素肥料は、温度の影響を受けるため、高温ほど溶出速度が速くなるなど、窒素の溶出パターンにはそれぞれ特徴があるため、土壌や品種などを考慮して肥料を選択します。

また、肥効調節型肥料は、全窒素成分量のうち速効性と緩効性の成分量を確認しましょう。速効性が少ない場合は、初期生育が遅れやすくなるので注意しましょう。

Ⅴ 水管理による適正な生育量の確保

① 本田の水管理

きめ細やかな水管理は、安定した作柄を確保するための重要な技術です。特に初期生育の良し悪しは、その後の生育量や出穂時期、収量まで影響します。そのため、活着後は温暖な日に浅水、寒冷な日に深水とし、水温・地温を高めて初期生育の促進に努めましょう。

また、極端な気象変動（異常高温・低温、強風等）の際は、的確な水管理を行い稲体へのストレスを軽減させましょう。

② 中干し

中苗あきたこまちでは、**6号1次分けつが発生（8.1～9葉期：6月下旬頃）**したら、遅滞なく中干しを実施し有効茎を確保します。また、一時的に土壌を酸化状態にし、根の活力を高め、根域を拡充させます。落水後、中干しと併せて溝切りを行い、排水を促します。

なお、中干しの期間は7～10日位とし、田面に亀裂が1～2cm入り足跡が付く程度とします。過度な中干しは断根等、根を傷め、稲体に悪影響を及ぼしますので注意が必要です。中干し終了後は間断かん水に移行します。

③ 高温障害を回避するための水管理

出穂前後は湛水管理（出穂後10日間程度）とし、その後はきめ細やかな間断かん水で高温でも登熟を促す水管理をしましょう。また、用水の確保が困難な場合は、溝切り後への通水等により土壌水分を補充し、夜間の地温低下を図ります。完全落水の時期は出穂30日後以降としましょう。

Ⅵ 雑草防除

近年、移植時期に気温が高くなることがあり、雑草の発生と生育が早期化する傾向にあります。除草剤散布が遅れたほ場では、高葉齢になったノビエなどの残草が見られます。雑草の多発は、埋土種子量を増加させるとともに、斑点米カメムシ類などの害虫の発生にも影響しますので、高品質米の安定生産のために、雑草防除を徹底しましょう。

① 一発処理除草剤による除草体系

一発処理除草剤だけで雑草防除する場合は、**代かきから10日後（ノビエ2葉期）まで**を目安に散布します。散布が遅れた場合や、雑草の後発生が見られた場合は、草種に応じた中・後期剤を適切に散布しましょう。

② 雑草多発ほ場での除草体系

雑草多発ほ場では、防除期間を長く確保するために、初期除草剤と一発処理除草剤の体系散布を行いましょう。この場合、**一発処理除草剤は、初期除草剤の散布10日後から14日後まで**を目安に散布します。

③ 水稲除草剤の安全使用と効果的な防除のために

除草剤を散布する際は、雑草の種類と量に応じた適切な除草剤を選択し、適期に散布するとともに、使用上の注意を守りましょう。

除草剤散布後7日間は止め水を行い、かけ流しや排水路への落水はやめましょう。また、水田周辺の水系など環境に配慮して、移植前には除草剤を使用しないようにしましょう。

水田雑草は、代かき後に発生し始めます。代かきから移植までが長くなると、散布適期の日数が短くなるので、計画的に作業しましょう。

除草効果を十分に発揮させるために、畦畔補修などの漏水対策を行うとともに、均一の水深を保つため、代かきは丁寧に行い、田面の均平化を図りましょう。

除草体系	田植え後の日数（目安）							
	田植え 当日	田植え 3日後	田植え 5日後	田植え 7日後	田植え 10日後	田植え 30日後	田植え 45日後	
一発剤のみの 単用防除	← 一発剤散布 〔代かきから10日後までを目安に〕 →					一発剤の散布が遅れた場合や、雑草の後発生が見られた場合などは、草種に応じた中・後期剤を適切に散布する		
初期剤と 一発剤の 体系防除	← 初期剤散布 〔使用する初期剤のノビエ晩限までに〕 →			← 一発剤散布 〔初期剤散布から10～14日後までを目安に〕 →				

Ⅶ 病害虫防除

① いもち病対策

本田におけるいもち病の発病主因は、育苗施設からの感染と感染苗の本田への持ち込みです。その他、乾燥状態で冬を越した稲残渣（稲わら・籾殻）が伝染源となります（冬期間に屋外で濡れた稲わら・籾殻のいもち病菌は死滅します）。

そのため、乾燥状態で冬を越した稲わら・籾殻を育苗施設から撤去し、種子消毒、育苗期防除を効果的に行うことで、持ち込みを最小限に食い止めましょう。さらに、本田の葉いもち防除を適正に行うことによって、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。

② 斑点米カメムシ類対策

薬剤による防除は、水田内にノビエやホタルイ等が出穂しているほ場や、イネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接したほ場、発生予察情報に基づいて多発が予想される場合などには、茎葉散布剤による出穂期10日後頃の通常防除に加え、同24日後頃の追加防除を必ず実施します。

また、畦畔・農道の除草対策として出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布後7日以内に草刈りを行い、本種の増殖源となるイネ科雑草の除去に努めましょう。

【アカスジカスミカメの発生活消長と薬剤防除及び草刈りのタイミング】

対策の内容	6月		7月			8月			9月				
	上	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬		
本田防除	アカスジカスミカメの発生活消長 点線：幼虫 実線：成虫												
農道 畦畔	6月上旬		稲出穂 10～15日前			草刈り 防除後7日以内			収穫 2週間前			収穫期	
法面 休耕田等	6月上旬		稲出穂 10～15日前			草刈り 禁止			収穫 2週間前			収穫期	